2018 フォトキナ報告

2018 Photokina report

市川 泰憲
Yasunori ICHIKAWA
Author JCII Camera Museum Steeringcommittie member

世界最大の写真映像見本市である「フォトキナ」が、去る9月26日から29日までの4日間にわたって、ドイツ・ケルンメッセで開かれた。

第1回フォトキナが開かれたのは、いまから68年前の1950年のこと。その開催は1年おきの偶数年といわれてきたが、実は初回から1952年の第3回までは毎年の開催だった。そして日本のカメラ生産の主軸を35㎜レンジファインダー機から一眼レフへと向かわせた、「ライカM3」の登場した1954年の開催以降、今回まで隔年に開催されてきた。

第1回フォトキナポスター(1950)

しかし時代の変化なのだろう、偶数年開催は今回の2018年を最後とし、2019年からは毎年5月に開催となることが告知されており、見本市として展示以外にも話題を提供した年となった。

そのような大きな節目となる開催であるが、事前にニコン、キヤノンから本格的なフルサイズミラーレス一眼が発表され、さらにフォトキナ開催前日には、ライカカメラ社・シグマ・パナソニックが協業して、フルサイズミラーレス一眼用のライカLマウントを3社で使用することが発表され、この会期に合わせパナソニックからルミックスのフルサイズミラーレス一眼の開発発表がなされるなど、話題性十分なフォトキナとなった。

■開催前から盛り上がる

実はフォトキナは会期前の25日にプレスデーという日があって、各社が事前に報道関係者に向けて新製品や展示概要などを紹介することになっている。いつもの報告なら各ブースの様子と新製品を紹介すればよいのだが、今回はそれだけではそれぞれの社の熱の入れ方が伝わらないので、一部プレス発表会からの情報を含めて紹介することにする。筆者が関係した部分だけを記すと、以下のようなスケジュールになる。

〈10:00〉ソニー、〈11:30〉ライカカメラ、〈12:30〉パナソニック、〈13:30〉富士フイルム、〈15:00〉キヤノン、〈16:15〉ニコン、〈17:30〉オリンパス、〈18:00〉シグマ、〈20:30〉富士フイルムX-Night in Photokina2018。もちろんこれだけにとどまらずこの間にレセプションなども行われ、さらに一部企業では国別に詳細な解説が別の日にもあるが、開催前日が最も忙しいことになる。

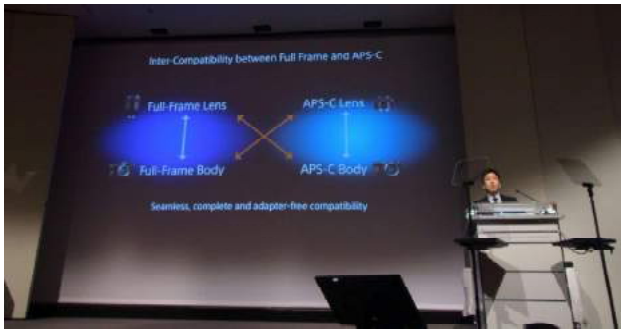
■ソニー

プレスデーの最初は、ソニーの発表会である。ソニーとしては、フルサイズカメラで№1のシェア、ミラーレス一眼でのシェアが№1である優位性を冒頭に訴えた。そして、α7R→α7RⅡ（フルサイズでの裏面照射タイプCMOS）→α9（メモリー内蔵フルサイズ積層型CMOSセンサー）へと技術的に大きく進化させてきて、感度、撮影コマ速度などの向上に加え、ソニーのミラーレス一眼のマウントは1つであることを強く訴えた。

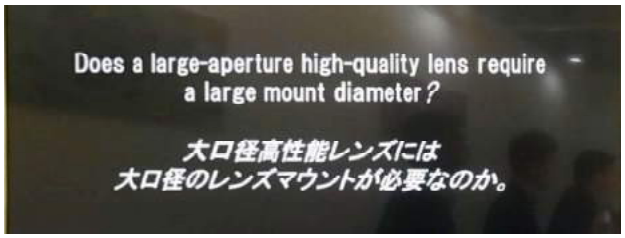
これは、発展過程からして、APS-C・シネ・フルサイズミラーレスのそれぞれのマウントが“Eマウント”で統一されていることの優位性のアピールである。また、レンズ部品、レンズ設計、レンズア

ソニーのミラーレス一眼での実績を解説するソニーイメージングプロダクツ＆ソリューションズ　デジタルイメージング本部シニアゼネラルマネジャーの田中健二氏

ソニーのマウントは１つ



APS-C とフルサイズマウント交換レンズの相互利用



大口径レンズマウントが必要なのか（プレス発表会より）

クチュエーター、レンズ金物、撮像板、画像処理回路、ビューファインダー、ボディケースなどが内製品であること、さらには撮像板とビューファインダーの製造ではトップシェアであることを訴えた。

この時期のソニーの新製品は、FE24mmF1.4GM と FE400 ㎜ F2.8GM OSS の交換レンズだが、近い将来には専用 E マウント交換レンズ群を 60 本に増やすというロードマップを披露。

また“大口径高性能レンズには大口径のレンズマウントが必要になるのか”という疑問を投げかけ、ソニーとしては 50 ㎜ F1.0 の大口径レンズの設計はすでにシミュレーション済みだが製品化はしないとのこと。そして次期 α シリーズには、人間の眼の瞳センサー AF が好評であったため、一部プロ写真家から要望のあったイヌ、ネコ、ライオン、鳥などの動物にも対応できる瞳 AF センサーを開発しているとのことだ。

まさに追いかける立場にあったソニーのカメラ作りが、追われる立場にあることを印象付けた発表会であった。さらに一部のネット上への噂に対してだろうが、ソニーとしては中判のデジタルカメラへの参入はしないということを明言した。

高い所に設けられた台から FE400mmF2.8GM をのぞく女性

ソニーのタッチアンドトライコーナー

交換レンズともども並べられたソニーαシステム

■ライカカメラ社

今回のフォトキナで最も話題を提供したのはライカではないだろうか。発表会では、まずインスタントカメラの「ゾフォート」、中判の「ライカ S3」、ライカ SL 用の交換レンズ「APO ズミクロン SL35mmF2ASPH.」と「同 SL50mmF2ASPH.」の発表を型どおり

新製品の紹介はインスタントのゾフォートから始まった

３社の協業の話は、事前に録画されたそれぞれの社の技術担当者のビデオプロジェクションでの話から始まった。
左から、パナソニック・森勉氏、ライカカメラ・Heico　SchnauBelt 氏、シグマ・大曽根康裕氏

3 社協業のシンボルマーク。 無限大の記号の〇の中に、 左側にはライカＬマウントのボディ側、 右側にはレンズ側が描かれている

ライカＬマウントの共同使用に関して３ 社のトップが登壇。 左から、シグマ社長・山木和人氏、ライカカメラ社主・Dr.アンドレアス・カウフマン、パナソニックアプライアンス社副社長・北川潤一郎氏

行った後に、ライカ・シグマ・パナソニックの協業の発表が行われた。

この発表会には、ライカカメラ社主のDr. アンドレアス・カウフマン氏はいうまでもなく、シグマ社長・山木和人氏、パナソニックアプライアンス社副社長・北川潤一郎氏が登壇し、事実上この場が共同記者会見というような設定だった。

これによると3社は、従来からのライカのミラーレスフルサイズ用のマウントである「ライカＬマウント」をそれぞれの社で使用するという。ライカＬマウントは、日本では古くからライカのスクリューマウントに対して代名詞的に使われてきたが、最近ではL39 と呼んだりしてきたが、あくまでも日本国内での呼称であった。そこで改めてライカＬマウントとはどのようなものかと調べてみると、マウント内径51.6㎜、フランジバック20㎜であるが、意外とライカ通の人でも知らなかった。

ライカＬマウントの共同使用構想はパナソニックが2013 年にライカカメラにもちかけたとされ、シグマへは2016 年とされている。

ライカとパナソニックの企業としての関係は、2001 年からルミックスDMC-LC5 にライカレンズを

ライカカメラ社のブース展示。商品よりはライツパークの宣伝に力を入れていた。背後には、もうひとつの提携企業である中国の携帯電話機メーカーであるファウエイ社のオレンジ色のブースが見える

パナソニックは創業100周年であり、デジタルカメラのミラーレス一眼「ルミックスG1」は10周年を迎えたことを報告する、山根洋介イメージングネットワーク事業部長

展示会場に置かれた「ルミックスS1R」と交換レンズ

搭載したときからと発表されているが、実際はフィルムカメラ時代の「ライカミニルックス」をパナソニックの系列会社ウエスト電気（現パナソニック フォト・ライティング）がOEM生産した1995年頃までさかのぼることができる。

同じようにして、ライカとシグマの関係では、シグマUCズーム28～70㎜F3.5-4.5を、金属鏡胴仕上げでライカバリオ-エルマーR28～70㎜F3.5-4.5として1992年にシグマ会津工場で製造されていたという過去の事実があるので、少なくとも1992年まではさかのぼることができる。

さらに見方を変えると3社ともかつては4/3規格に賛同して、いずれもカメラやレンズをだしていた会社であることなどから、4/3グループの一部がライカ判フルサイズでもう一度結集したという見方もでき、いわゆる下請けという関係から協業関係に進んだということでは、これからのカメラ産業のあり方を示す注目される動きだ。

ライカカメラ社のブースは、2016年は業者対応で一般の客はoff limitsであったのが、2018年は面積は拡大したが製品展示はそこそこにして、ウエッツラーのライツパークを再現して入場者への

山根氏がフルサイズミラーレス一眼のルミックスS1Rを持って発表すると、前方の取材陣は総立ちに近いほど立ち上がって撮影していた。この写真は少し落ち着いてから撮影

休憩場所を提供していた。なお、ライカカメラ社はフォトキナ会場の1号館を2012年から2016年まで全面使用していたが、このうち2016年は作品展示だけで、商品展示は別にブースを設けていたが、今回は作品展示を全面的に取りやめて、2号館でのブース展示、それもライツパークの宣伝にエネルギーを注いでいたのが印象的だ。

■パナソニック

ライカに続くのはパナソニック社だ。パナソニックは2018年で創業100周年だそうで、さらにパナソニックのミラーレス一眼「ルミックスG1」が登場して10周年だという。パナソニックも先行社と同様に、撮像素子、画像処理エンジン、レンズなどが自社技術であり、さらにレンズ・ボディの手ブレ補正、4k・10bit動画、高速AFなどの先進的技術の採用の優位性を訴える等を行った。

そして、ライカカメラ社、シグマとの協業関係の第1弾としてライカSLマウントを採用したフルサイズミラーレス一眼の「ルミックスS1R/S1」をSシリーズとして発表。S1Rは47Mp、S1は24Mpということで、2019年には50㎜F1.4、24～105㎜、70～200㎜と3本のSLマウント交換レンズを発売し、2020年にはさらなる交換レンズの充実を図るとしている。すでに発表・発売されているライカカメラ社の7本、さらには協業に加わったレンズメーカーとしてのシグマの交換レンズが加わることも、視野に入れての発表は協業ならではのメリットがすでに現れている。

パナソニックとしては今後も、マイクロ4/3のGシリーズに加え、35㎜フルサイズミラーレス一眼のSシリーズの2本立てで行くことを公表している。また展示会場控え室には、参考品としてルミックスS1Rと交換レンズ3本がモックアップ状態で展示されていたが、パナソニックがフルサイズと

展示会場では、ステージのカラフルなモデルを撮影できる

会場に展示された「ルミックスS1R」のデザインスケッチ

「ルミックスS1R」のレンズを外した状態（モックアップ）

してミラーレス一眼に参入するにあたっての独自開発とされる撮像素子の細かい仕様は、未だ公開されていないので、カメラとしての詳細は不明であるが、2019年2月ごろには公開されるという。

なお、この時期のパナソニックの新製品はコンパクトカメラで4/3型センサーを使ったルミックス DC-LX100M2と1/2.3型センサーを使ったルミックス DC-FT7だった。

フルサイズミラーレス一眼マウント/フランジバック比較

マウント名	カメラ名	撮像素子	マウント内径	FB	電子接点数	開始
ソニーFE	ソニーα7/α9	CMOS	46mm	18mm	10	2013年
ライカL	ライカT/SL	CMOS	51.6mm	20mm	10	2014年
ニコンZ	ニコンZ	CMOS	55mm	16mm	11	2018年
キヤノンRF	EOS R	CMOS	54mm	20mm	12	2018年
ライカL	ルミックスS1R/S1	―	51.6mm	20mm		2019年
ライカL	シグマ	Foveon	51.6mm	20mm		2019年

プレス懇親会でシグマとしての3社協業への今後の方針を述べる山木和人社長（写真提供：山田久美夫氏）

シグマの展示会場内に示された3社協業のメッセージ

■シグマ

シグマの発表は夕方からだったが、協業3社をまとめるためにあえてこの順にした。シグマの発表会では、山木和人社長がライカ、パナソニックの協業に対してシグマとしての考え方を紹介した。

残念ながら私は他の会合とぶつかり、この場には出席することができなかったが、シグマの方針は、以下のとおりである。1）フルサイズのフォビオンセンサーを搭載したLマウント対応のミラーレス一眼を2019にだす、2）SAマウントカメラは今後新型はださない、3）SAマウントレンズの開発は継続する、4）SA-LとEF-Lマウントアダプターを2019年に投入、5）ライカLマウントレンズを2019年に投入予定、6）マウント交換サービスを2019年から開始、ということだ。

この対処の仕方は、交換レンズメーカーとして、カメラメーカーとしてある意味当然のことであるが、フルサイズフォビオンセンサー搭載のボディ、さらには、フォビオンの高分解能に耐えられる交換レンズの

シグマのブースは、スチル用にArt、Sports、Contemporary、さらにシネ用とゾーンに分けて展示された

開発にはかなりの困難が予測される。

表には、Lマウント規格をまとめてみたが、パナソニックの撮像素子の詳細、さらには昨今のミラーレス一眼機のマウント電気接点は他社の例に見るように増加傾向にあるので、Lマウントは従来の接点数で将来もカバーできるのか不明な点であり、最終的な各社協業モデルでは増えるのではないかと予想できる。

シグマとしてこの時期の新製品は、スチル用に28mmF1.4DG HSアート、40mmF1.4DG HSMアート、56mmF1.4DC DNコンテンポラリー、60～600mmF4.5-6.3DG OSHSMスポーツ、70～200mmF2.8DG OSHSMスポーツの5本、シネ用として40mmT1.5FF、105mmT1.5FFの2本が新製品だった。

■富士フイルム

フォトキナで、注目されたもうひとつの企業として富士フイルムをあげることができる。今回の発表はかなり力が入っていて、古森重隆会長の挨拶で始まった。毎年フォトキナに参加している業界紙記者によると、初めてのことだという。

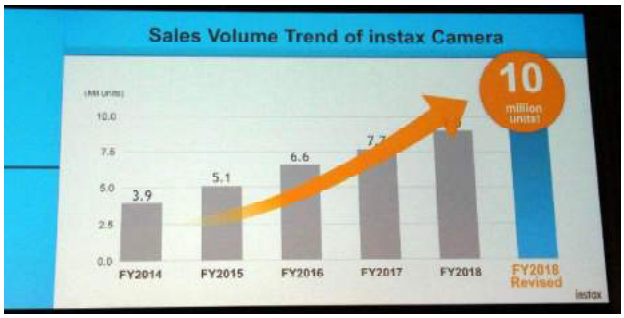
すでにAPS-C判2600万画素ののX-T3を発表していたが、富士フイルムのデジタルカメラ技術が、1988年のDS-1Pから30年、84年のカラーフィルムの色彩技術、70年の光学技術・放送用TVレンズ技術などの高度なテクノロジーに基づいていて、GX/GFXカメラ・レンズは、ここ2年で60%アップしていると報告。

そしてこの時期の新製品として、中判GFX50Sに続く機種として、より小型・軽量化し、かつての中判レンジファインダー機を連想させるデザインの“GFX50R”、GFX50Sの上位機として裏面照射・像面位相差AFを可能とした100Mpの撮像素子搭載の“GFX100”を2019年に発売するとして、話題を呼んだ。また光学機器メーカーとして従来は外販していたデジタルプロジェクター用光学系を自社製

発表会は古森重隆代表取締役会長の挨拶から始まった

GFX50Rを手にした光学・電子映像事業部長の飯田年久氏

1億画素の中判デジタルGFX100。富士フイルム初の裏面照射CMOS、像面位相差AF、中判初のボディ内手ブレ補正採用



インスタックスカメラは2018年には1,000万台を売り上げ

新製品GFX50Rはタッチアンドトライコーナーで試写できた

キヤノンプレス発表会にて。それぞれのボディとマウントアダプターの解説。“DAS EOS SYSTEM”ドイツ語だ

品の業務用プロジェクターを発表、さらに感材メーカーとしての富士フイルムとして、新製品として“フジカラークリスタルアーカイブプロフェッショナルペーパーMAXIMA”とデジタルカメラで撮影しさまざまな画像処理を施し、カメラ内のインスタントフィルムに出力するハイブリッドインスタントカメラ“instax SQAUER SQ20”を発表するなど、企業としての幅の広さをアピールした。このうち発表会で見せたインスタックスの生産は2018年には1,000万台に達するというもので、CIPAカメラ統計の2017年実績が25,088,712台とされているが、富士のインスタントカメラ1,000万分の台数と加えると、日本関連のカメラ生産は年間約3,500万台超えということになる。

■キヤノン

キヤノンのこの時期の新製品は、すでに日本国内で発表された3,030万画素のフルサイズミラーレス一眼「EOS R」と4本の交換レンズととしてRF24～105mmF4 LIS USM、RF50mmF1.2L USM、RF28～70mmF2 L USM、RF35mmF1.8 Macro IS STMと3種のマウントコンバーターだ。発売は日本国内は10月25日からであったが、当初ボディとともに発売されたのは、24～105mmズームと50mmF1.2の2本と2種のマウントコンバーターだった。

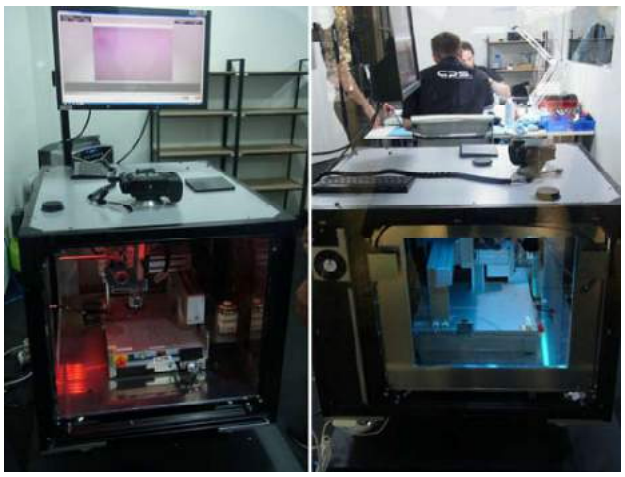
キヤノンの現地でのプレス発表会は、かなり割り切られたもので、特別に部屋は用意されていたが、決して広いとは言えず、スピーチはドイツ語のみということで、明らかに他社とは一線を画し、ドイツ国内向けという感じであった。このような発表スタイルは2016年からで、キヤノンとしてはフォトキナをドイツ国内のカメラショーと位置付けていたのだろう。2014年には多くの人を集め、真栄田雅也事業本部長（当時）の英語でのスピーチに始まったのに対し、大きな様変わりを見せてい

背後はEOS　Rのタッチアンドトライコーナー。キャッチフレーズはCAPTURE THE FUTURE（未来をつかまえろ）、手前のパネルにはSETTING NEW STANDARD（新基準でセット）というわけだろうかRF50mmF1.2がついている

ナノUSMやEMD、スーパーUDレンズなどの技術を紹介

プロ写真家によるEOS　Rのインプレッション。かなりのお客を集めている。（DE）と書かれているからドイツ向けか

インクジェットプリンターはPro100クラスが新しい用紙とともに展示されているが、今までよりは少ないスペースだ



キヤノンのCPSコーナーで実演展示されていた、センサークリーニング装置。青・赤・紫のような色光でスキャンして上のモニターに表示され、順次クリーニングしていく

た。すでに2019年からの毎年開催のフォトキナを見越しての対応だったようだ。

とはいっても会場に占めるブースの面積はまずまずの広さであり、会場内にはEOS Rのタッチアンドトライコーナーがあり、現地プロ写真家によるEOS Rインプレッションでコーナーには、いつも多くの人々が集まっていた。

■ニコン

ニコンは、フルサイズミラーレス一眼「ニコンZ7/Z6」をWeb上でのティザー広告を活用して8月23日に発表し、フォトキナ会期中の9月28日に発売という戦略にでた。このZシリーズは、新Zマウントを採用し、フランジバック16mm、マウント内径55mm、電子接点数11という仕様だ。

そして、この時期発売のZシリーズ用交換レンズとして発表されたのは、ニッコールZ24～70mmF4、Z35mmF1.8、ニッコールZ50mmF1.8の3本とマウントアダプターFTZであるが、Z50mmF1.8がその後発売が延期され、2本の交換レンズでスタートとなった。いずれにしても、マウントアダプター

3000mm相当の画角が得られる「クールピクスP1000」も新製品

プレス発表会で新製品ニコンZ7の特長である、大マウント口径とフランジバックについて解説する牛田一雄社長

ニコンの光学基礎技術を解説する御給伸好映像事業部長

フルサイズミラーレス一眼「Z7」のコーナーは人気だ

「ニコンZ7」は女性にも人気のようだ

展示ブースではニコンが2016年9月に買収した英国Mark Roberts Motion Control社の産業用ロボットが「Z70」を腕の先端に取り付け、軽快なリズムに合わせて踊っていた

使用で従来からの豊富なFマウント交換レンズが使えるという、ミラーレス一眼ならではのスタートである。

今回の展示にあたって、ニコンのキャッチコピーとして、CAPTURE TOMORROW（明日をつかもう）とMIRRORLESS REINVENTED（ミラーレス再発明、よみがえったミラーレス）とかが目につく。これが自社に向けた言葉か、既存のミラーレスカメラ全般に向けた言葉かはわからないが、キヤノンのCAPTURE THE FUTURE（未来をつかまえろ）も似たようなイメージであり、少なくともこの2社はミラーレス一眼を次の時代のカメラシステムと考えているのがよくわかる。

■オリンパス

オリンパスは、このフォトキナで独特な展示ブース作りで話題を提供した。それというのも、過去3回2012年からフォトキナ会場のホール1を埋めてきたライカカメラ社が撤退し、そのあとにオリンパスが出展したのだ。

それも、新製品展示ということではなく、ホール1全体を“Perspective Playground（遊び場）”と名付け、入口でカメラを貸し出し、場内で遊んでもらい、写真を撮影をして、プリントして、撮影後のメディアカードをもらって帰れるというサービスイベントだ。従来はフォトキナ会場外で行われていたが、フォトキナには場所としては組み込まれているが、ある意味で独立した展示であり、なかなか人気のスポットであった。

ホール1は、もともとケルンメッセ主体の、作家や写真関連大学、専門学校生の作品展示の場としてあったが、3回ほどライカが写真展示をしていたのに対し、オリンパスへと代替えされたが、これからのフォトキナを表す姿という印象が残った。

オリンパスPerspective Playgroundの入口

入口で希望するカメラを貸してもらえる

かなりのお歳の方もカメラ操作に熱心だ

特設されたブランコに乗って記念撮影

ロシア企業Shvabeのブース

「ゼニットM」のボディにはブラックとシルバーがある

背面から見ておわかりのようにライカそのものだ

DESIGN IN KARASNOGORSK RUSSIAと刻印されている

ボディ側、レンズ側とマウント側とも6ビットコードとセンサーは搭載なし

外装、底蓋には、肉が盛られ独特なデザインである。バッテリーはライカのまま

ZENITAR35mmF1.0、8群9枚構成。最短撮影距離0.8m～∞

■ロシアからデジタルライカ「ゼニットM」

今回のフォトキナで話題を呼んだのは、ロシアの医療、宇宙、天体、照明、など幅広い光学機器・材料を扱うShvabeグループの一員“ZENIT”がライカMマウントのレンジファインダー式のデジタルカメラ「ゼニットM」(www.zenit.camera)を展示したことだ。このShvabeだが、モスクワ大学に留学してロシアカメラに詳しい写真家Aさんに聞くと、“シュヴァーベ”と発音するそうだ。

このカメラ、ロシアおよびヨーロッパの富裕層に向けたカメラとされ、24MpのCMOSセンサー搭載のライカM(Type240)のマイナーチェンジ品のようで、年末から2019年の初頭に5,000～6,000ユーロで発売されるという。

しかし、今なぜゼニットライカなのだろうか? すでにゼニットは2018年に、フルサイズミラーレス一眼への参入が噂され、今回のフォトキナに登場するのではないかと予測されていたが、意外やゼニットライカMが発表されたのだ。このボディとレンズの仕様は細かく発表されているが、トップカバー背面にはDESIGN IN KARASNOGOLSK RUSSIAと刻印されており、受付で聞くとデザインはクラノスゴルスクで行われ、製造はドイツだという。さらに信頼できる筋に聞くと、ゼニット側からライカカメラオーナーのDr.カウフマン氏に話が持ち込まれ、ライカカメラ側で製造したという。このカメラの出生の由来は、さまざまな憶測が飛び交っているが、将来的にライカLマウントの協業グループに加わることはないという。いずれにしても、今回標準レンズとして装着されていたゼニター35mmF1.0など、第2次大戦後も綿々と続いてきたロシアの写真光学技術に対するアピールのためではないかと思う。

リコーは、単焦点APS-Cコンパクトの「GR Ⅲ」が新製品

■リコー

リコーのブースには、前々から予告されていた「リコーGR Ⅲ」が初日から展示されていた。発表はフォトキナ開幕の前日9月25日だったが、従来からのGRシリーズを発展させ、2,400万画素APS-C判CMOSセンサーを採用し、センサーシフト式の手ブレ補正機構を搭載している。GRシリーズは好評とのことであり、特に中国市場ではかなりの売れを示しているそうで、実際10月13日には上海撮影機材城のなかに「リコーイメージングスクエア上海」をオープンさせ、GRのワークショップはかなり盛況だったという。発売は2019年3月。

今年のリコーブースで特徴的だったのは、ペンタックスを傘下に収めてからの展示は、今まではずばり1/2に分けて、リコーシータゾーンとペンタックスゾーンという感じで左右に分けて構成されていたのが、今回はそのような分け方でなくペンタックスのなかに、左にシータ、右にGRⅢのコーナーが小さくあったのが印象的だっだ。

■タムロン

交換レンズメーカーとしてのタムロンはこの時期は「SP15～30mmF2.8 G2」と「17～35mmF2.8-4」の2本が新製品であるが、いずれもすでに国内

タムロンブース受付

ケンコー・トキナーは、スリック、ケンコー、トキナーと3つのブランドを前面に打ち出していた

ケンコー・トキナーの隣はフランスの子会社コーキンフィルターのブースがかなりの面積を占める

ではニコン用が発売されており、追ってキヤノン用が10月初頭には発売というタイミングであり、広報担当者は申し訳なさそうであったが、ブースには担当技術者も控えていていた。ブースでは、交換レンズ群の展示に合わせ、プロ写真家によるセミナーなども行われ観客を集めていた。

■ケンコー・トキナー

かつてフィルターメーカーという形でスタートしたケンコーは社名をケンコー・トキナーと変更してからは、日本のレンズメーカーとしては、独

㊧トキナーFIRIN100mmF2.8FE AF MACRO、OPERA16～28mmF2.8FF、OPERA50mmF1.4FF、㊥ケンコープロフェッショナルイメージングのHORSEMAN ブランドの独立ブース、㊨ホースマンの新製品デジタルカメラ用のテクニカルビューカメラAxellas

リングフォトでマニアらしいカップルが品定めをしていた

サムヤンのブースは毎年大きくなっている。左奥には、日本での代理店であるケンコー・トキナーのブースが見える

サムヤンのこの時期の新製品はＡＦ１４ｍｍＦ２．８Ｆ ㊧、85mmF1.8ED UMC CS㊨、XP10mmF3.5、XP14mmF2.4など

自の形態で発展してきている。

ブランドを数多く持つだけに新製品数も多く、フルサイズ一眼レフ交換レンズの「トキナーオペラ50mmF1.4 FF」を筆頭に、ケンコーテレプラスHD proシリーズ、フィルター、スリック三脚、各種用品を飾っていた。なお参考展示として、ソニーミラーレス用の「トキナーフィリン100mmF2.8FE AF MACRO」、フルサイズ一眼レフ用の「トキナーオペラ16～28mmF2.8FF」も飾られていた。

このほか、ホースマンブランドでは昨年と同様にケンコーグループとは別の場所に、新製品としてテクニカルビューカメラ“Axellas”をだしていた。

■フォクトレンダー（RING Foto、コシナ）

製造は、過去のフィルムカメラを含めて日本のコシナが製造する交換レンズだが、日本ではコシナが販売するが、海外ではドイツのリングフォトが販売を行っている。今回の新製品参考展示は、ノクトン50mmF1.2 Asph.（VM、E）、カラースコパー21mm F3.5 Asp.(E)、ウルトロン35mmF2Asp.(VM)などであるが、国内では発表済みのものもある。

■新興国のレンズメーカー

いわゆる東南アジア圏の交換レンズメーカーの進出は目を見張るものがある。この時期の大きな動きとして、ここ数年来のAF化に加え、ズームレンズが登場するようになったことだ。

●サムヤン（SAMYANG、三洋光学、韓国）

すでに日本市場においては、ケンコー・トキナーが早期から販売代理店となっているので、おなじみのレンズメーカーである。一時期は一部の広角レンズが、天文写真ファンに人気とされていたが、昨今はどうだろう。今回会場で配布されていたカタログでレンズ種と本数を数えると、AF対応が8本、マニュアルフォーカスが20本、シネレンズが19本もある。これらは、マウント、画面サイズなどによって異なるが、それなりの品ぞろえであり、

㊤韓国「アイリックス社」のブース

㊦新製品150mmF2.8マクロ、小型・軽量、9群12枚構成、絞り羽根11枚、CPU内蔵、5個所にシーリング、インターナル焦点式

(http://en.irixlens.com/)

今後はますますAF対応のレンズが増えてくるだろうということは、想像に難くない。ただここ数年の動きとしては、カメラ製造から撤退した韓国サムスンの技術者が入って活躍しているという。(www.samyanglensglobal.com)

● IRIX（アイリックス、韓国）

韓国のレンズメーカーだが、スイスでデザインして、中国で製造しているという、ここ数年来で表に出てきた交換レンズメーカーだ。この方面に詳しい方に伺うと、サムヤンにいた人たちが設立した会社で企業としてかなり余裕があるという。確かに、ブースを撮影していたら、なかなかおしゃれなトートバックをくれたが、中にはカタログの他、チョコレート、ピンバッチ、メモ用紙などが入っていた。もともとは、11mmF4、15mmF2.8の超広角系の品ぞろえであったが、今回で150mmF2.8マクロが加わり、3本のラインナップとなった。いずれもマニュアルフォーカス方式だ。

● KIPON、IBERIT（中国）

ブランド名は、KIPONとIBERITという名称だが、キポンはマウントアダプター、イベリットは交換レンズと分けて使用している。正式には、Shanghai Transvision Photographic Equipment Co.,Ltd.であるが、日本のCP+には最も早くから出展している。この時期の、レンズとしての新製品は特に見当たらないが、ライカMマウントのイベリットシリーズのマウントに、フジX、マイクロ4/3マウント

キポンブース。中央にレンズ、周辺にマウントアダプター

㊧AF・AE連動の「キヤノンEF→ソニーE」マウントへの変換アダプター。マウント部には外部から回転可能なNDフィルターが組み込まれている。アメリカ市場で人気だそうで、3年ほど前から商品化されている
㊨ハッセルブラッドレンズ→フジGFXマウント用変換アダプター。マクロ機構付き。マミヤ→GFX用もある

ラオワのブース。毎年確実に拡大されている

トを加え、さらにピンク色のレンズを加えるなど、製品としてのバリエーションを増やしているが、光学系としての新製品は休息状態だ。

基本的にこの会社はマウントアダプターがメインのようで、この時期は富士GFX用の各種マウントアダプターがメイン。また中国市場ではキヤノンEOS Rがすでに発売中だとかで、日本での発売時にはマウントアダプターを20数種そろえるという。

● LAOWA（老蛙、ラオワ、中国）

すでにCP+でもおなじみの中国レンズメーカーである。日本では、ケンコー・トキナーの子会社であるサイトロンジャパンが国内の販売代理店と

ラオワの新製品、㊧ソニーFE用10～18mmF4.5-5.6ズームレンズ、㊨マイクロ4/3用4mmF2.8フィッシュアイ

ユンノウのブース。展示の主体は交換レンズ

ユンノウの交換レンズ群

なっている。アポダイズド光学系を組み込んだボケドリーマー105mmF2、フルサイズ超広角でディストーションのない12mmF2.8 Zero-Dなどユニークな商品が多く、この時期にはラオワとしては初のズームレンズとしてソニー用FE10～18mmF4.5-5.6、アリフレックス用PLマウントの25～100mmT2.9、2本を参考展示した。また35mm判用100mmF2.8 2Xウルトラマクロ APO（キヤノン、ニコン、ペンタックス）、フジGFX用17mmF4Zero-D、マイクロ4/3用に12mmF2.8と4mmF2.8フィッシュアイなども近日発売として発表されていた。

● YONGNUO（ユンノウ、中国、深セン）

ユンノウも日本のCP+に近年出展しているので、知る人も多いだろう。正式には英文表記すると、Shenzhen YONGNUO Photographic Equipment Co.,Ltd.となる。登場当初からAF対応で、外観デザイン的には、洗練されてはいるが、ちょっと見た目はキヤノンライクな感じであるが、最新のを

ビルトロックス社の展示は各レンズのMTFを示している

ビルトロックスの85mmF1.8を付けたフジフイルムX-H1

見ているとタムロンやニコン的なものも登場してきている。このほか撮影レンズ以外には、テレコンバーター、クリップオンタイプストロボ、ビデオ用照明器具、マウントコンバーターなどと多品種そろえている。(www.hkyongnuo.com)

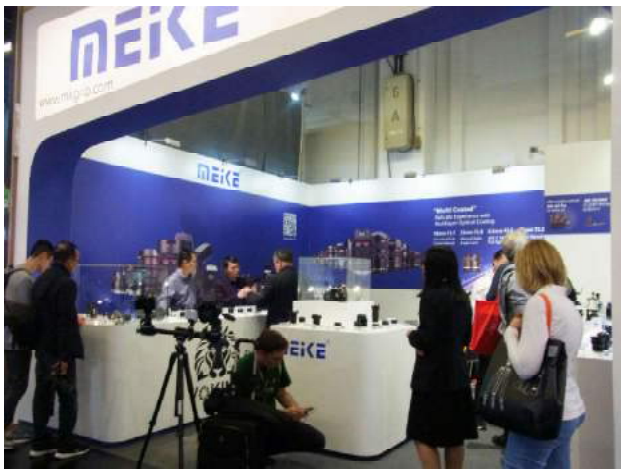
● VILTROX（ビルトロックス、中国、深セン）

ビルトロックスと読むのであろうか。昨年の報告では見当たらないが、英語名ではShenzhen Jueying Technology Co.,Ltd.で、この時期にはソニーFE、フジXマウントでAF対応の85mmF1.8（7群10枚構成）、ソニーFEマウントで電子接点付きマニュアルフォーカス（exif対応）のPFU PBMH 85mmF1.8（7群10枚構成）、ソニーFEマウントのPFU PBMH 20mmF1.8ASPH.（9群12枚構成）の3本が展示されていた。いずれもレンズ構成図、硝材の種類、非球面、MTF表示など、テクニカルデータを前面に出している。

● MEIKE（香港美化デジタルテクノロジー）

こちらの会社も香港と書いてあるが、実際は中国本土で製造している（http://mkgrip.com/）。

この時期の新製品はソニー用50mmF1.7、キヤノン一眼レフ用でAF対応の85mmF1.8、一眼レフ・マイクロ4/3・APS-Cに対応の25mmF2、シネ用の25mmT2.5などである。いずれも中国レンズメーカーの一部の社に共通したことだが、AF技術の搭載、85mmF1.8の登場などが似通っていることだ。



香港 MEIKE のブース

日本でもおなじみ中国用品メーカーK&F コンセプトのブース

マウントコンバーターばかりを展示するShenzhen Commlite Technology.Co.,Ltd。すでに日本でも販売されている

このほか中国には小さいながらもブースを構えた、マウントコンバーターだけの専業メーカー（上掲のCommlite）であったり、普通絞りで昔ながらの望遠レンズ、望遠ズームレンズ、光学ガラス、光学フィルターなどを扱ったメーカーも多く、とてもこれらの企業をこの場ですべてを紹介することはできないので、このあたりで一段落とする。

■アクセサリーから銀塩写真関係まで

フォトキナは本来見本市として、展示社のさまざまな商品を見つけことができる場でもある。以下、写真関係の商品を中心にお見せする。

かつては大判テクニカルビューカメラのメーカーであったカンボ社はデジタルカメラ用のテクニカルビューカメラを展示していた

その昔はカメラを製造販売していたドイツ・ブラウン（BRAUN）社はプロ用のフレームなどを販売している

こちらもドイツの老舗三脚メーカービローラ（BILOURA）社は、三脚に加えカメラ用のザックなども扱っている

コダックモーメント、コダックアラリスのブース。外周にプリントを施しているのがいかにも感材メーカーらしい

この時期から日本でも再発売になったエクタクロームが特別なアナウンスもなく壁面に埋め込まれていた

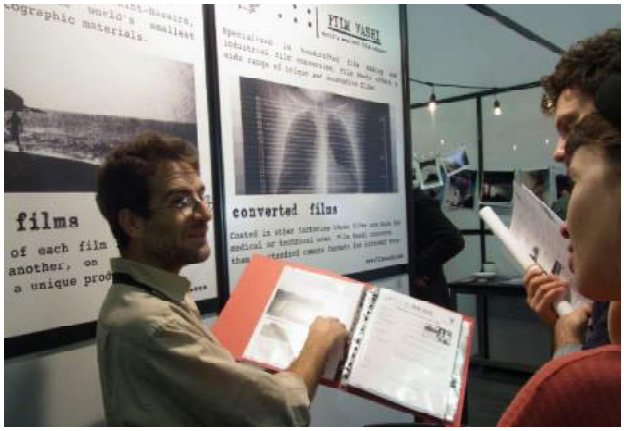
コダックのデジタル機器を製造販売するのは、コダックの商標権をもつJK イメージングである

中判デジタルカメラのフェイズワン社。日本のマミヤを傘下に収めたが、ブースには日本人は見えなかった

三菱製紙ブース

ノーリツ鋼機ブース。写真プリントの出力紙は、銀塩カラーペーパーかインクジェット用紙だ

銀塩感材メーカーの“ADOX”社ブース。同じブロックでFilm Washi、Sine Still Filmなどの解説も行われていた



和紙フィルムの説明が熱心に行われていた

エプソンは大型インクジェットプリンターを展示

cewe はイギリスのフォトブックの会社。フォトキナ会場で連日大きなバックを配っていた（cewe-photoworld.com）

「MODE360°」デジタル一眼レフを使って商品を360°回転させて動画を撮る撮影台テムシステム（mode360.eu）

ハッセルブラッドブース。奥には親会社のＤＪＩが見える

フランスのインクジェット用紙メーカー「キャンソン」

「ｈｉｔｉ」は台湾の熱染料昇華型プリンターメーカー。一般写真や証明書写真に特化している（www.hiti.com）

「PANONO」複数個カメラの付いた球体を投げ上げて360°の写真を撮ることができる。ドイツ製（http://www.panono.com）

「GOPRO」この手のアクションカメラの出展は元祖GOPROをのぞいて、最盛期に比べてほとんど見なくなった

ＪＯＢＯ社は９０年以上の歴史を誇るドイツの写真用品メーカー。もともとは小規模用の現像器を作っていたが、最近はビューカメラも扱うようになったようだ。(www.jobo.com)

中国の大判写真機メーカーShanghai Shenhao Professional Camera Co.,Ltd.。4X5～8×10までのフィルム用として供給している。(www.jobo.com)

フィルターのマルミ光機ブース

フィルム、インスタント、レンズと多彩なＬＯＭＯ社のブース

手縫いのカメラケース、ストラップなどのカメラ用品の製作を実演する韓国のJnK-handworks（artedimano.co.kr）

フィルター、三脚などを扱うローライは出展していたが、フィルムのローライはでていなかった

ハッセルブラッドのフード似のデジタルカメラ用フード。マグネットで吸着させて折りたたんだり、引き出したり簡単に行える。こういう写真用品がよいようだ。早速某社が取引交渉開始（www.ggsfoto.com）

写真経営者協会（ＪＰＥＡ）のブース

通路の写真展示。パリで見たことがある写真だ

毎回、キヤノンが展示する通路の写真展

イギリスのフォトブックを扱うcewe社のフォトコンテスト結果。ホール間をつなぐ屋外での展示

富士フイルム“PHOTO IS”想いをつなぐ50,000人の写真展、会場内点在する空きスペースをたくさん埋めていた

■フォトキナを終えて

さまざまな話題を提供した2018フォトキナだ。今回は実は思うところあって、２つの疑問を関係者に可能な限りぶつけてみた。

１つは、ライカ・パナソニック・シグマの３社にぶつけてみたのは“3社協業でいちばんメリットある社はどこだろうか”ということだ。それぞれお答えいただいたのは責任ある地位の方だ。ただ、取材の守秘義務ということを遵守して、ここでは明らかにできませんが、無用な混乱を避けるためにということでご容赦いただきたい。

まずLマウントを提供するライカカメラ社：それは答えられません（キッパリと）、続いてパナソニック社は：ライカカメラ社では（少し考えて）、さらにシグマに聞くと：わが社です（キッパリと）というわけだ。私のサイドからあれこれ考えると、3社協業だからそれぞれメリットは十分にあると思うのだが、カメラは作るけれど一番リスクの少ないのは、レンズメーカーでもあるシグマではないだろうか。シグマ自身は、SAマウントのミラーレス機sd Quattro Hを発売して以来、独自のミラーレス用マウントを開発していたというし、今回の協業に関しては金銭的なやり取りはないということで、マウント開発費はなくなるので、渡りに船だったのだろう。

そして3社協業をユーザーサイドからすると、既存の撮像素子を使ったライカ、独自新開発のセンサーを搭載というパナソニック、さらにはフルサイズ判フォビオンセンサーのシグマというわけで、使う側にとっては撮像素子の好みによっても選択できる要素が生まれるというのも楽しみだ。

２つ目は、次回“2019年の５月のフォトキナには参加されますか？”と聞いてみました。これに関してはメッセ事務局が、次回参加の企業47社をロゴマーク入りで発表しているのでわかりやすい。しかしこの中には日本の大カメラメーカーが入っていない。しかし聞いてみると、ただいま交渉中だとかで、ぎりぎりの交渉を続けているのだろう。

ただ、多くの専業メーカーは、まだ考えていない、今回のフォトキナが終えてから、じっくりと考えてみたいというのだ。もちろん、でませんと明言する企業もあるわけで、メッセ事務局としては気が抜けないというのが正直なところだろうが、参加企業にすれば次回が半年後に迫っていることと、費用的な問題が大きくのしかかっていること

会場内のサービスいろいろ。㊧コスプレしたスタッフが会場内を歩いて気軽に記念写真に応じてくれた、㊥演奏するバンド、㊨ケルンメッセで８月に行われた国際ゲームショーのシンボルロボット、このほかスケートボード曲技などもあった

右のブルーの看板は２０１９ フォトキナ参加企業のリスト

ケルンメッセ駅前はMesse City Koelnとして工事が進行中

は間違いないようだ。

次回の開催は、５月８日（水）～11日（土）の４日間ということで、2018年と同じ日程数だ。2018年の９月28日の金曜日は夜９時まで開場するという新しい試みをとっていたが、参加社側にすると、期間が短くなれば１日あたりの単価が上がり、時間を伸ばせばスタッフの負担も大きくなるということもあり、難しいことだ。

この点に関しては現地企業も同じようで、ライカカメラと同様にフォトキナにおいて歴史あるドイツ企業であるカールツァイスは、2018年フォトキナへの出展を行わず、27日夜に独自の発表会を開いて、「ZX1」というアンドロイドOSでレンズ非交換式の3,740万画素フルサイズデジタルカメラを内示した。これは撮影後アドビライトルームCCで編集加工でき、内蔵512GBのSSDに記録できるカメラだ。過去にドイツ光学界の名門であるカールツァイスがフォトキナに不参加ということは聞いたことがない。2019年５月のフォトキナには出展するのだろうか?

全般的な展示内容は、業者間取引の場としてのフォトキナではなく、かつてのメイン広場にはケルンメッセ主催らしき写真展示や企業関連のより一般ユーザーを意識した展示会などと、会場内には今まで以上に多くの写真展会場が設けられ、コスプレイヤーが会場内を歩いたり、果てはゲームロボットが

㊧ケルン中央駅自由通路のフォトキナ開催に合わせたカメラ店広告、㊨ケルン市内には大聖堂前と少し離れた町中にカメラ屋さんがあり、それぞれメーカーの場所取りがある

登場というわけで、すでに展示会としては大きな変化が現れていた。なおメッセ事務局のファイナルレポートによると、2018フォトキナは127カ国から約18万人の来訪者があった。会期は４日間で展示スペースは縮小されたが、会場内の混雑度は一般観客が動員されたせいか増していた。

また９月21日～30日までは同じケルンの町で87ものギャラリーが連携した「Internationale Photoszene Koln Festival」が開かれる。これは写真のハードに対してのもう１つの写真の動きだ。かつてフランスのパリフォトがカメラに主体を置いていたサロン・ド・ラ・フォトとが同時期開催になったように、これからは写真のハードと作品展示が近づくような時代がくるのだろうか。

【お断り】次回フォトキナ開催は、2018年12月3日付ケルンメッセ事務局の発表により、2019年の開催は延期され、2020年5月27日（水）から30日（土）の4日間にわたって開かれることになりました。